

### 3. 発達科学部・ 人間発達環境学研究科

I	発達科学部・人間発達環境学研究科の	
	研究目的と特徴	3-2
II	「研究の水準」の分析・判定	3-4
	分析項目 I 研究活動の状況	3-4
	分析項目 II 研究成果の状況	3-8
III	「質の向上度」の分析	3-9

## I 発達科学部・人間発達環境学研究科の研究目的と特徴

本学部・研究科は、人間の発達と市民社会の形成を同時並行的かつ複眼的に視野に入れながら、人間それ自身の発達と発達を支える環境に関する原理的、実践的研究に取り組むことを目指している。現在、本学部・研究科の目指す研究領域への体系的な取り組みは国内的にも国際的にも先例がなく未開拓であるため、本学の中期目標に示されている「国際的教育研究拠点として、世界的水準の学術研究を推進し、卓越した研究成果の創出に努める」ことについて、本学部・研究科としては、固有の研究領域としての研究蓄積と体系化を進めている。

### (研究目的)

本学部・研究科は、文系・理系の理論や学内外の実践的知見を総動員し、より総合的な観点から人間発達研究に新たな学問的地平を拓くことを目的としている。産官学民協働型の実践的研究、分野横断型のプロジェクト研究を推進し、アクティブ・エイジング支援、ライフヒストリーによる心理教育支援、高度教員養成プログラム開発、バイオマスエネルギー利用等に関する研究など、人間の発達及びそれを取り巻く環境に係る学際分野における高い研究実績を活かし、21世紀を主導する総合的学知の可能性を創出する。

### (組織構成)

これらの目的を達成するため、本学部・研究科では《資料1》のような組織構成をとっている。

《資料1：組織構成》

専攻	講座	教育研究分野
人間発達専攻	こころ系講座	心理発達論、健康発達論
	表現系講座	表現創造論、表現文化論
	からだ系講座 学び系講座	身体行動論、行動発達論、 教育科学論、子ども発達論、 発達支援論
人間環境学専攻	環境基礎論講座	自然環境論、数理情報環境論
	環境形成論講座	生活環境論、社会環境論
	環境先端科学講座（連携）	（博士課程後期課程のみ）

### (研究上の特徴)

理念・目的に即した研究を推進するため、プロジェクト研究を研究科として支援したり、附属研究施設を通じたプログラムや共同研究創出支援、サバティカル制度などを積極的に導入するなど、多様な取組を行っている。また、「学術 WEEKS」や「研究科シンポジウム」の継続的実施、「発達支援インスティテュート」を中心とする実践的共同研究プログラムの推進、それに加え、研究科独自の「研究推進支援経費」や「プロジェクト研究費」を通じた共同研究の創出支援などの取組を行っている。

さらに、外部資金の獲得に向けては、教授会において「科学研究費補助金の申請について」等のFDを行うことで、積極的に申請を促している。なお、研究成果については、「神戸大学研究者紹介システム」を通して適宜公表・発信している。

発達科学の分野では、多様な個別的専門領域の実績を土台にしながら、相互にまた他の機関と連携することを通して、人間の発達及びそれを支える環境に関わる特色ある実践的な学際研究を推進しており、これらの研究活動を支援し、さらにそれに続く研究プロジェクトを推進するために、本研究科では《資料2》の組織体制をとっている。

《資料2：組織体制》

- ・研究科全体の総合的な研究推進体制  
研究科に置かれた研究推進委員会による「研究科における研究の推進のための企画立案及びその実施」に係る活動を維持発展させる。
- ・共同研究シーズの創出支援体制  
研究科の理念と目標に沿って複数の教員が協働で実施する分野横断型学際研究を研究科として支援する「研究推進支援経費」「プロジェクト経費」等を維持発展させる。
- ・実践的研究の推進体制  
アクション・リサーチの手法による実践的研究を進める本研究科附属研究施設発達支援インステイテュート（特にヒューマン・コミュニティ創成研究センターを中心に、発達科学研究の推進体制を維持発展させる。
- ・異分野・他機関との連携強化  
人間の発達及びそれを支える環境を多面的に捉え新たな発達科学の学問的地平を拓くために、異なる専門分野間の連携、外国の大学を含む他機関との連携を積極的に進める。
- ・研究推進のための施設設備の整備  
多世代共生型コミュニティ創成のための地域住民交流の場や新たな人間発達のあり方を模索する表現創造の場など共同研究を推進する施設設備の整備に努める。
- ・社会貢献と研究活動の一体化  
近畿圏の行政・民間団体、学校・教育機関等との連携を図り、研究活動をとおした社会貢献の取組を一層推進する。

（想定する関係者とその期待）

本学部・研究科の目指す研究には、地域、行政、企業、市民との有機的連携と協働が不可欠であり、協働のパートナーであると同時に研究成果の受益者である、地域のボランティア団体、NPO、地域活動グループ、神戸市、兵庫県内の教育委員会、学校、企業等や、本学部・研究科に入学してくる学生や社会人、協働活動の利用参加者などを関係者として想定している。彼らは、人間それ自身の発達と発達を支える環境に関する原理的、実践的研究を期待しており、彼らとの恒常的・協働的な研究活動を通じて、新たな機関や団体との連携や研究活動のテーマを形成するなどして、その期待に応えるべく研究を展開している。

## Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

#### 観点 研究活動の実施状況

(観点に係る状況)

Iの目的・特徴で述べたように本学部・研究科の教員は多彩な分野にわたって研究活動を推進し、未踏研究分野の開拓にも積極的に取り組み、以下のような実績をあげている。

#### ①論文・著書等の研究業績や学会での研究発表等の状況

平成22年度から平成27年度までの発表研究論文数は《資料3》のとおりである。学術論文数は、教員の専門分野が多様で、区分けの解釈が分野により異なるため、研究ノートと会議録を含む形で集計を行っている。組織的な支援活動(「質の向上度」分析項目Ⅰ事例①(3-9頁)参照)の結果、平成22年度と比較し、著書では63%増、学術論文では49%増、国際会議では126%増、作品総数で154%増となっているように、教員の研究活動は活発となっており、全体として教員一人当たりの研究業績等の件数は57%増となっている。

《資料3：発表研究論文数(平成22、23、24、25、26、27年度累計)》

	著書	学術論文	国際会議	作品総数	計	和文以外	学術論文 (査読付)	著 (学外共 文)学術論	教員数	年平均件数
平成22年度	52	192	39	13	296	59	116	73	99	3.0
平成23年度	60	223	64	18	365	78	136	105	105	3.5
平成24年度	46	203	53	23	325	65	101	95	100	3.3
平成25年度	80	247	84	37	448	88	147	114	97	4.6
平成26年度	85	287	88	33	493	80	142	116	104	4.7
平成27年度	70	263	87	21	441	75	113	113	102	4.3
総計	393	1415	415	145	2368	445	755	616	607	23.4

#### ②特許出願・取得状況

研究成果の特許出願は、全学組織「連携創造本部」の支援と本学部・研究科の支援を連携する形で推進しているところであるが、平成22年度から6年間の特許出願件数は2件となっている《資料4》。

《資料4：特許・発明出願状況》

年度	特許発明名称
平成22年度	糖鎖修飾核酸及びその使用
平成23年度	該当なし
平成24年度	糖鎖修飾三量体構造オリゴヌクレオチド及びその使用
平成25年度	該当なし
平成26年度	該当なし

#### ③共同研究、受託研究の状況

共同研究・受託研究の実施件数の推移を《資料5》に示す。近年特に受託研究が増加している。これらの中には震災関連の研究など、社会的な要請に応えるものが多くみられる。さらに、国際交流推進の一環として、学術交流協定締結大学との共同研究や海外研究者の受入を行っている《資料6》。

《資料5：共同研究・受託研究の推移》

単位：千円

	平成22年度		平成23年度		平成24年度		平成25年度		平成26年度		平成27年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
共同研究	6	7,151	6	6,060	9	8,389	4	3,592	7	4,162	5	4,310
受託研究	1	2,000	7	13,652	9	26,539	10	56,520	8	75,673	12	67,915

《資料6：外国人研究者受入状況》

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
受入人数	2	2	4	8	3	5

#### ④競争的外部資金の獲得状況

研究を支える研究資金は、基礎的な運営費交付金によるものの他、様々な競争的外部資金の獲得によって賄われている。年度別にみると、概ね増加傾向にあり、平成24年からは1億円を超えている。平成26年度は《資料7》に示す大型プロジェクトの採択に加え、その他の競争的資金の獲得額が大幅に増加し、共同研究・受託研究の獲得額の増加もあり競争的外部資金の総額が増加している《資料8～10》。

《資料7：平成26年度大型プロジェクト採択課題名》

プログラム名	採択課題名
科学研究費補助金・基盤研究(A)	気球搭載型エマルジョンガンマ線望遠鏡による宇宙線加速天体の精密観測
環境省・環境研究総合推進費補助金	震災に伴う人工資本・自然資本ストックの損失と対策の評価
(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構	微細藻類の改良による高速培養と藻体濃縮の一体化方法の研究開発

《資料8：科学研究費補助金の申請・採択、金額に関するデータ》 単位：千円

	申請		採択		金額
	新規	継続	新規	継続	
平成22年度	41	31	12	31	55,400
平成23年度	63	27	26	27	83,800
平成24年度	91	37	20	37	105,800
平成25年度	53	44	16	44	111,770
平成26年度	63	41	23	41	111,129
平成27年度	70	40	20	40	101,450

《資料9：奨学寄附金に関するデータ》 単位：千円

	件数	金額
平成22年度	16	15,893
平成23年度	9	15,272
平成24年度	12	11,484
平成25年度	12	9,250
平成26年度	21	14,237
平成27年度	20	12,240

《資料 10：競争的外部資金の獲得状況》単位：千円

	科学研究 費補助金	共同研究	受託研究	奨学 寄附金	計
平成 22 年度	55,400	7,151	2,000	15,893	80444
平成 23 年度	83,800	6,060	13,652	15,272	118784
平成 24 年度	105,800	8,389	26,539	11,484	152212
平成 25 年度	111,770	3,592	56,520	9,250	181132
平成 26 年度	111,129	4,162	75,673	14,237	205201
平成 27 年度	101,450	4,310	67,915	12,240	185195

### ⑤ 研究科研究推進特別経費の状況

本学部・研究科では、研究推進特別経費制度を設けプロジェクト研究を公募して予算措置をし、これにより本研究科の特徴ある研究活動を支援している。

### ⑥ ヒューマン・コミュニティ創成研究の推進

HCセンターを中心にした研究活動は、研究科全体の総合的な研究推進体制（後掲《資料 13》参照）のもと、大学が地域、行政、企業、NPO、NGO、市民と連携しながら、より実践的な観点から人間的な社会（ヒューマン・コミュニティ）の創成をめざす「ヒューマン・コミュニティ創成研究」の理念に基づき、より総合的な観点から人間発達とそれを取り巻く環境発達に対する多様な研究活動に取り組んできた。

第 1 に「あーち」は実践研究の拠点の 1 つであり、研究者、学生、市民、地域の連携協力団体等との連携を拡大させ《資料 11》、平成 23 年以降は年間利用者数がおよそ 3 万人で推移している《資料 12》。第 2 に HC センターのプロジェクト「市民科学に対する大学の支援に関する実践的研究」では、神戸に文化としての科学を根付かせるため、平成 17 年から科学者と市民の双方のコミュニケーションの場として「サイエンスカフェ神戸」を 41 回開催している。この実績が認められ、平成 19 年度から始まった「大学コンソーシアムひょうご神戸」と「(財)ひょうご科学技術協会」主催の「サイエンスひょうご」から支援要請があり、その開催に協力している。

さらにこれらの実績をふまえ、HCセンターは、国連大学が認証する「持続可能な開発のための教育推進地域拠点」の兵庫一神戸地域への設定に貢献し、その事務局を担っている。

《資料 11：2014 年度 連携協力関係にある組織・団体など》

団体名	連携協力の内容
神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係	0 歳児のパパママセミナー&中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
神戸市灘区まちづくり推進部	なだ桜まつり/地域コーディネーター
神戸市灘消防署	消防訓練 地震津波等防災セミナー
神戸市地域子育て支援センター灘 (通称：子育て応援プラザ灘)	ふらっと 相談員
灘区公立保育所 (7 か所)	ふらっと 相談員
灘区地域コーディネーター (元幼稚園教諭)	ふらっと 相談員 ボランティアコーディネーター
灘区社会福祉協議会	情報交換
灘区内児童館 (10 か所)	情報交換

六甲道児童館	中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
六甲道児童館ユースセンター	情報交換
灘区民ホール	博物館実習
社会福祉法人たんぼぼ	みんなで歌おう！
社会福祉法人たんぼぼ	居場所づくり
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	居場所づくり
社会福祉法人かがやき神戸	居場所づくり
神戸ユニバーサルツーリズムセンター	めだか親子クラブ
NPO法人神戸子どもと教育ネットワーク	筆をもとう
チャレンジひがしなだ	アートセラピー
クエスト総合研究所	ふらっと 相談員
NPO法人マザーズサポータ協会	アウトリーチ・サービス
亀田マタニティ・レディース・クリニック	ふらっと 相談員 / パパママセミナー おくちをあ〜ん
灘区歯科医師会	0歳児のパパママセミナー
兵庫県歯科衛生士会 神戸東支部	家族で話そう！子育て
ママ・リッシュ トマト	高校生の赤ちゃんふれあい体験学習 / 人形劇
兵庫県立西宮高等学校	地域母子保健実習の場として提供
神戸市看護大学（灘区保健福祉部から 依頼）	育成連携支援実習の場として提供 ボランティア（授業）の場として提供 ぽっとらっく / ドーナッツ ピーナッツ
園田学園女子大学	
神戸海星女子学院大学	
神戸大学医学部保健学科地域連携セン ター	

《資料12：「のびやかスペースあーち」利用者数（延人数）》

	子ども	おとな	計
平成 22 年度	12,504	12,098	24,602
平成 23 年度	15,670	15,097	30,767
平成 24 年度	15,259	14,683	29,942
平成 25 年度	15,996	15,393	31,389
平成 26 年度	15,206	14,840	30,046
平成 27 年度	16,506	15,744	32,250

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

多様な外部資金を獲得しており、その額も資金種別ごとに増減はあるが、全体として増加傾向にある。研究資金増加と並行し、その活動成果として研究発表数も増加しており、著書・学術論文を筆頭とした研究実績が顕著であると共に、和文以外での発表数も増加傾向にあり、本学部の人間とそれを取り巻く環境の発達に関わる多様な学問分野の国際的発信に貢献している。このような研究活動の活性化は、学術論文や特許などの形で、多数の発表がなされており、平成 22 年度から 26 年度まで年平均研究数が 3.0 から 4.7 に増加している数値にも反映され、これらの状況から、本研究科の研究活動の実施状況は、期待される水準を上回るものであると判断する。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

**観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)**

(観点に係る状況)

本学部・研究科の特徴は多岐にわたる研究分野で既存の学問体系にとらわれることなく「人間」と「環境」を軸に研究を進めていることであり、「研究業績説明書」もその特徴をあらわしている。業績の選出に当たっては、本学部・研究科の研究の多様性を考慮に入れ、各教員が、平成 22 年度から平成 26 年度の間に公刊した代表する業績を上げ、その中から「人間」と深く関わる研究を選出し、学術的意義のあるものとしては①権威ある学会の査読付の論文、②インパクトファクター値の高いもの、また社会、経済、文化的意義のあるものとしては、①新聞や雑誌等で書評や記事として掲載された著作物・作品、②社会的要請があるものを挙げた。「研究業績説明書」に示すとおり、本研究科の特徴を示す様々な人文社会・自然科学の領域において学術面及び社会、経済、文化面の両面において数々の重要な成果をあげている。詳細については【別添 1】参照。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

本研究科では多種多様な研究活動が行われ、国内外からの評価を得ている。著名な学術誌掲載を中心として、権威の各関連学会や各種公演での受賞実績、国内外での出版物と評価に表される学術的貢献、行政・教育機関での導入や知見応用、各種メディアでの掲載等、社会的注目度も高く、研究成果と社会的影響力の実績を示している。本研究科の特徴を表す個別研究と組織的研究の統合による学際的な研究成果と共に、国際共同研究や研究成果の世界的発信や注目度も特筆すべきである。さらに社会貢献活動の実践と研究活動を両軸としたアクション・リサーチの成果も蓄積され、これらの活動を推進する組織的取り組みも積極的展開が見られることから、本研究科の研究成果の状況は期待される水準を上回ると判断する。

### Ⅲ 「質の向上度」の分析

#### (1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

##### 事例① 研究活性化のための組織化と支援活動による研究資金の獲得

人間発達環境学研究所における研究活動は、乳幼児期から高齢期に至るまでの人間の発達とそれを取り巻く環境を対象に、そのあり方を総合的な視点から応用的・実践的に分析し検討する点に特徴をもつ。本研究科では、多様な専門分野に属す教員がこうした基本方向に即して分野横断的共同研究をより一層積極的に進めていくために、平成 25 年度より 5 専攻体制から 2 専攻体制へと改組し、組織の柔軟化を図った。また、本研究科には附属研究施設として「発達支援インスティテュート」を設置しており、そこに含まれる「ヒューマン・コミュニティ創成研究センター」や「サイエンスショップ」を中心に実践的な共同研究を支援・推進している《資料 13》。また、外部資金の獲得に向けては、教授会において「科学研究費補助金の申請について」等の FD を行うことで、積極的に申請を促している。研究成果については、「神戸大学研究者紹介システム」を通して適宜公表・発信している。これらの取り組みと前述した研究活性化に向けての組織化と支援活動による効果も含め、平成 22 年度から平成 26 年度までの科学研究費補助金の申請件数は 41 件から 63 件に増加しており、平成 22 年度の新規採択が 12 件、継続が 31 件で合計 55,400 千円から、平成 26 年度には新規採択が 41 件、継続 23 件の合計 111,129 千円の約 2 倍の獲得額の増加が見られる。また、これら支援活動の結果、平成 22 年度と比較し、著書では 63% 増、学術論文では 49% 増、国際会議では 126% 増、作品総数で 154% 増となっているように、教員の研究活動は活発となっており、全体として教員一人当たりの研究業績等の件数は 57% 増となった。

##### 《資料 13：研究活性化のための組織化と支援活動》

研究科としていくつかのプロジェクト研究を推進・支援するとともに、「学術 WEEKS」や「研究科シンポジウム」の継続的实施、「発達支援インスティテュート」を中心とする実践的共同研究プログラムの推進、それに加え、研究科独自の「研究推進支援経費」や「プロジェクト研究費」を通じた共同研究の創出支援《学内プロジェクト研究重点支援研究》、一定の期間研究に専念できる「サバティカル制度」の実施などの取組を行っている。

##### 《学内プロジェクト研究重点支援研究》

年度	プロジェクト課題
平成 22 年度	サイエンスカフェ開催支援
平成 23 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「遊び」動作からみた基礎的運動スキルの獲得と発達に関する研究</li> <li>・個々の行動変容とそれに関わる環境要因との関連をもとにした健康増進支援プログラムの開発</li> </ul>
平成 24 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門領域複合型「こども教育専門職」育成プロジェクト</li> <li>・ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援</li> <li>・アクティブ・エイジングに根ざした他世代共生型コミュニティの創成</li> </ul>
平成 25 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援</li> <li>・環境ストレスと疾病リストを客観的に評価するシステムの開発</li> <li>・都市域における人と生物多様化のつながり</li> <li>・生活安全指標 Human Life Security Index の考察：質の高い生活を実現する人間環境の総合的研究とその指標化</li> <li>・持続可能な発展に向けた市民による科学理解の深化に向けた基礎研究－確率論的推論理解を中心にして－</li> </ul>

平成 26 年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「発達と学びの連続性を踏まえた幼少接続期の教育のあり方」研究プロジェクト</li> <li>・人間環境形成における生活安心指針の考案に向けた理論・実証研究</li> <li>・都市と農村の文化・経済・生活からみた生態系サービスの評価・管理・保全に関する学際的研究－六甲山系の生態系と阪神間地域をフィールドワークとして－</li> </ul>
----------	--

### 事例② 発達支援インスティテュートにおける外部資金の獲得

本研究科は、前述したように人間それ自身の発達とそれを取り巻く人間環境を対象にした応用的・実践的研究を進めるにあたり、「ヒューマン・コミュニティ創成研究」という理念に基づき、文系・理系の理論や学内外の実践的知見を総動員し、より総合的な観点から人間発達研究に新たな学問的地平を拓くことを目的として設立し、外部資金獲得においても成果を示してきた《資料 14》。これらの成果として、神戸大学情報データベース (KUID) からみた平成 22 年度から平成 27 年度までの本研究科教員の著書、学術論文、国際会議、作品のカテゴリー別総数の増加傾向から、本研究科の研究基盤整備に基づく研究活動の成果が現れてきていると判断する。また、研究プロジェクトの例で示した、自然科学系・人文社会科学系の両分野におけるトップクラスジャーナル（例：教育心理学研究、体育学研究、特別支援教育研究、社会科教育研究、Ecological Applications、Ecological Monographs、Energy Economics、Journal of Applied Ecology、Journal of Clinical and Experimental Neuropsychology、The Journal of Physiology、Journal of Mathematical Biology、SIAM Journal on Applied Mathematics、Procedia-Social and Behavioral Sciences、International Journal of Behavioral Development、British Journal of Developmental Psychology）での掲載と学術賞等の受賞、引用論文実績、国内外の学会での基調・招待講演、研究活動に関わるテレビ・ラジオへの出演や新聞、プリントメディアでの特集、書評・論文評での掲載紹介、また、国や地方公共団体等の審議会委員、推進委員、評価委員を通じた政策策定への貢献等、これまでの研究内容と成果が社会・経済・文化の発展に資するものであることが判断される。

#### 《資料 14：発達支援インスティテュートの競争的外部資金受入れ状況》

科学研究費補助金等の競争的外部資金受入れ状況を以下に示す。なお、対象は、発達支援インスティテュートを兼任する教員（14名）とした。

#### 《発達支援インスティテュートの競争的外部資金受入れ状況（件）》

年度	科学研究費補助金				
	挑戦的萌芽	基盤研究(A)	基盤研究(B)	基盤研究(C)	助成金等
平成 22 年度	1	0	3	1	3
平成 23 年度	1	0	2	1	1
平成 24 年度	3	2	3	2	3
平成 25 年度	3	2	3	2	2
平成 26 年度	2	2	1	3	2
平成 27 年度	3	1	1	1	2

上記外部資金のうち基盤研究(A)を獲得した2件の研究（「生活史法を基盤とした臨床物語論の構築と公共化」「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」）は、いずれも本インスティテュートの教員が代表者となり

本研究科所属の教員と連携しながら進めている。特に前者は、心理教育相談室と HC センターとが協働して進めるライフヒストリーによる心理教育支援プログラムである。

## (2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### 事例① 人間と環境の発達に関わる研究基盤整備と成果

本研究科では、人間それ自身の発達とそれを取り巻く人間環境を対象にした応用的・実践的研究を進めるにあたり、「ヒューマン・コミュニティ創成研究」という理念に基づき、文系・理系の理論や学内外の実践的知見を総動員し、より総合的な観点から人間発達とそれを取り巻く環境発達に対する多様な研究活動に取り組んできた。(詳細については、「観点 研究活動の実施状況 ⑥ヒューマン・コミュニティ創成研究の推進」参照)

### 事例② 研究推進特別経費を通じた研究活動の活性化と外部資金獲得への効果

本学部・研究科では、独自の研究推進特別経費制度を平成 18 年に設定して、プロジェクト研究予算を増額し、重点支援研究の特別枠を設定している。この重点支援研究は、平成 18 年度より、科研費の申請・審査実績の分析結果を研究推進特別経費制度によるプロジェクトの選定に反映しており、その結果として平成 22～27 年でも高度で学際的な研究が進んでおり《前掲資料 10》、科研費の獲得などにつながっている《前掲資料 7》《前掲資料 8》《前掲資料 9》《資料 15》。

#### 《資料 15：研究推進特別経費制度による支援事例》

- 多世代共生型コミュニティの創成研究（科学研究費：基盤研究（A）「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」(平成 24 年度～平成 26 年度)）：都市部高齢化地域を対象に、教育学、心理学、社会学、健康・スポーツ科学、芸術学、生活科学、建築学等を専門とする本研究科所属の教員が、地域住民や行政と協働し、心身ともに健やかで将来の希望に満ちたウェルビーイング（well-being）なコミュニティづくりを目指すアクティブ・エイジング支援プログラムを開発する。本研究に関しては、共同研究開始当初より国内外の学会で精力的に発表を行い、既に多くの論考や報告書も刊行している。
- ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援（科学研究費：基盤研究（A）「生活史法による臨床物語論の構築と公共化」(平成 24 年度～平成 28 年度)）：本研究科における ESD 及び発達支援の実践研究をもとに、ライフヒストリー（生活史）を自己物語という観点から基礎づけ、災害や障害によりライフコースを描くことが困難になった当事者と協働してライフヒストリーを描くことで、医学や教育にまたがる領域において顕在化する社会的諸問題の理解と解決にむけた心理社会支援プログラムを開発する。本研究に関しては、この分野で先進的な英国研究者と共同研究を進めており、国際学会で共同のシンポジウムを開き、そこで得られた知見を Palgrave Macmillan 社より出版している。